

Environment and Health ISSN 1880-4055

環境と健康

Vol.24 No.4 WINTER 2011

特集1 / 地震国の原子力発電を考える

特集2 / 現代日本の教育課題—環境変容への対応—

Editorial / 激動の時代に生きる

いのちの科学 / 年輪年代法と木質古文化財への応用
/ 2011年東北地方太平洋沖地震

トピックス / ホスピスは生き活きと生きるどころ

随想 / 中央アジアの青い国ウズベキスタン

オピニオン / 医師になるということ

—若い人たちのために— (Ⅲ)

サロン談義 / (連歌形式) 生老病死の医療 (Ⅱ)

連載講座 / メタボの正体 (Ⅳ)

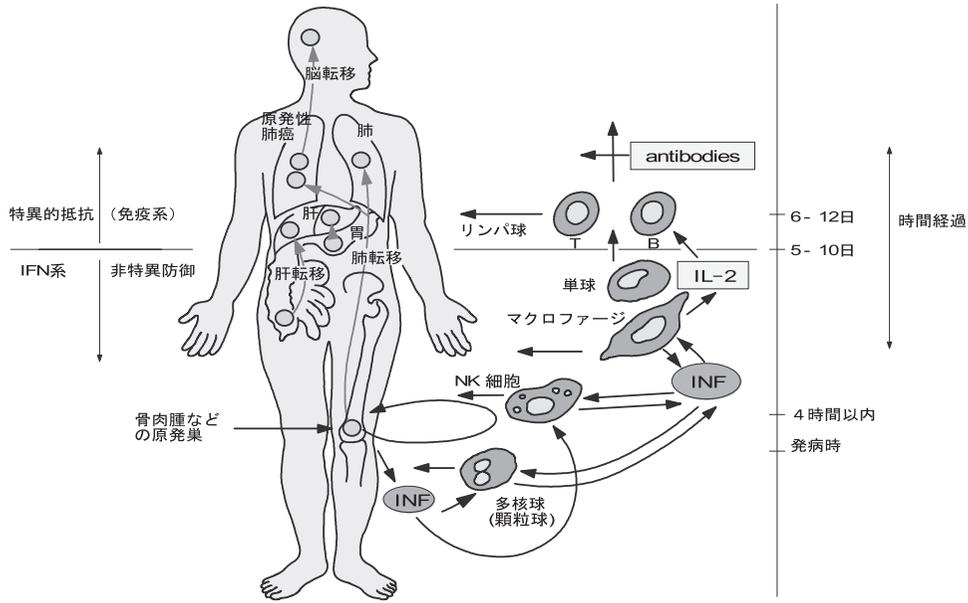


コーカサス
原産の

ナリネ菌と インターフェロン産生能



ナリネ菌



発病(腫瘍・ウイルス病など)後時間経過と生体内防御機構に活躍する諸細胞と諸因子との関連性
出典: 岸田 綱太郎: Interferon, 日本医師会雑誌93-8、付録、臨床医のための免疫学

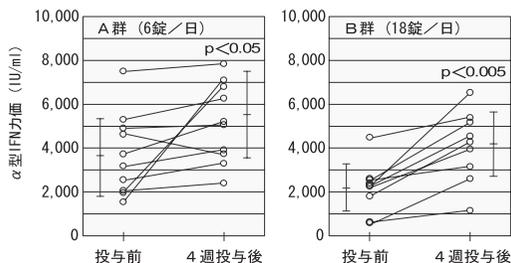
「ナリネ菌」はアルメニア共和国科学アカデミーで開発された乳酸菌の一種で我国に導入され、その生理活性が研究されました。

その結果、「ナリネ菌」には体の中でインターフェロンを作り出す能力(インターフェロン産生能)を高める作用があることが明らかになりました。インターフェロン産生能には個人差があり、「ナリネ菌」の摂取によって、その能力が増強されることが期待されます。

公益財団法人体質研究会では「ナリネ菌」の摂取による体質改善について、他の研究機関の協力を得ながら総合的な研究をすすめています。

公益財団法人 体 質 研 究 会

ナリネ菌配合物の摂取試験



ナリネ菌配合物のα型インターフェロン産生能増強効果
(喜多正和、岸田綱太郎: 基礎と臨床 Vol.21 No.12, P75, 1987)

● ナリネ菌配合物 6粒/日あるいは18粒/日の4週連日投与によりα型IFN産生能の増強効果が認められ、統計学的にも各々 $p < 0.05$ 、 $p < 0.005$ で有意差がありました。(左図)

● 上記条件でγがたIFN産生能およびNK活性をも並行して測定した結果、いずれも増強効果が認められました。

● ナリネ菌配合物 4週連日投与前後の一般血液検査、尿検査の結果、副作用は全く認められませんでした。

以上の結果、各種感染症あるいは癌に対する予防効果が期待されます。

「ナリネ菌」に関する資料その他ご照会は下記にお願いします。

株式会社 ナウカコーポレーション

〒530-0005 大阪市北区中之島6丁目2番40号 中之島インテス10F
(電話06-6136-5501/FAX06-6136-5705)



0120-77-6200(9:00~17:30 土日祝を除く)

<http://www.nauca.jp/>

特集1 “地震国の原子力発電を考える”

東日本大震災からすでに半年以上が経つが、それがもたらした福島第一発電所の事故は、現段階で小康状態に落ち着いたとはいえ、発電所の先行きと行く末はいまだに不明のままである。本特集の意図するところは、未曾有の原発事故を深刻に受け止めて、原子力発電という電力政策の是非をあらためて検討するため、専門家の見解をひろく聞くということにある。原子力発電という政策形成にとってかなり重要だと思われる、原子力工学、放射線生物学、政策ガバナンス論という三つの分野から、それぞれの見解が提示される。

特集2 “現代日本の教育課題 —環境変容への対応—”

数年来、有志の教育研究者が集まり「現代日本の教育課題」に関し研究会で検討してきました。今回の特集は、その成果の一部を報告するものである。わが国の教育の現状をみると、近年、国際学力テストであるPISAの成績が落ちてきて国際的な競争に対応できるのか不安視されている。また、青少年の非行やいじめにも歯止めがかからず、個に応じた教育も十分に行われていないという危機的状況がみられる。臨時教育審議会の答申（1987年）でも指摘された硬直的教育、画一的教育が依然として続いていて、少子高齢化、グローバル化、情報化などの大きな社会変化に対処しきれしていないのではないかと危惧される。そこで、この特集では日本の教育環境の変容を見据えつつ、主要な教育分野においていかなる問題に直面し、いかなる課題に立ち向かう必要があるかについて考察した次第である。

激動の時代に生きる

山岸秀夫*

本誌編集部のあるパストールビルは、百万遍知恩寺の隣にある。知恩寺は浄土宗七大本山の一つで、その総本山は連日観光客で賑わう知恩院である。しかし知恩寺でも毎月15日の百万遍念仏数珠繰りの日には、境内が「手作り市」に開放され、大賑わいである。浄土宗の開祖は法然上人（1133-1212）であり、来年2012年が丁度上人没後800年にあたるので、「上人800回大遠忌法要」が今年から始まり、知恩寺も大賑わいである。法然の弟子である親鸞（1173-1262）が開祖となった浄土真宗の本山である、東西両本願寺も京都にあり、来年が親鸞上人の750回忌に当たるので、大法要が営まれ、全国の信者が京都に集まる。

翻って、両上人が布教を始めた13世紀に遡ると、政治が墮落し、その権力が京都の公家から鎌倉の武家へと交代し、日本の文化史が大転換を始めた激動の時代であった。わが国初の国難としての蒙古軍の襲来があり、庶民の生活は困窮を極めていた。仏教にもシャカの死後千年の末法思想が拡がり、新しく思想界のリーダーとなったのがいわゆる鎌倉仏教であった。平安の天台、真言の難解な密教から派生した、浄土宗、浄土真宗、法華宗（開祖、日蓮）、時宗（開祖、一遍）などと、中国から渡来した禅宗の臨済（開祖、栄西）、曹洞（開祖、道元）である。前者は、現世の苦しみから逃れ、来世の浄土での幸せを念ずる専修念仏の他力本願で、その平易な教義が一般庶民に受け入れられて爆発的に普及したのに対し、後者は自力に集中して悟りを開く心身一如の修行で、武家階級に受け入れられた。いずれも現在まで伝えられ、明治維新の廃仏毀釈にも耐えて、京都市内にはまだ1,800近くの寺院が活動している。

本号 Books で紹介されている『中西 進：こころの日本文化史』によれば、日本の文化史がほぼ700年の周期に分けて概観され、古代、中世、現代に区分されている。古代は飛鳥時代から平安時代まで、中世は鎌倉時代から江戸時代で終わり、現代は未完で、19世紀末の明治維新に発し、26世紀までまだ少なくとも500年続く。各周期の文化は前半、数世紀の移行・生成の動乱期とその後の達成期に分けられる。この斬新な文化史

*公益財団法人体質研究会主任研究員、京都大学名誉教授（分子遺伝学、免疫学）

の時代区分は、従来の日本史の時代区分とは異なり、単純明快である。「知情意」は円満な人格の形成に必須の知性・感情・意思を指すが、これを文化史の時代区分に当てはめている。すなわち、古代文化は自然の姿を心に映す芸術中心の「情の文化」で、大自然の秩序に従い、中世文化は武訓と商知の「知の文化」で、自然に備わった倫理を学び、現代は自然を所有し、改変しようとする「意の文化」としている。しかし日本人の「こころ」の深層には、「モノ」の霊力、超自然的な力を信ずる縄文的情念が存在することを認めている。

筆者の住む城陽市東部丘陵には、古代の古墳などの埋蔵文化財が多く、その保全に先立ち、地域の歴史を知ろうとして30数年前に、「緑と教育と文化財を守る会」が結成された。今年も11月に「大塩平八郎の乱とおかげ踊りの背景－幕末の寺田村」と題したパネルを市民文化祭に展示した。そこには幕末の長期に及ぶ飢饉のため、町での「打ちこわし」や農村での「百姓一揆」、世直しを訴える民衆運動としての「おかげ踊り」（ええじゃないか）が紹介され、村役人の制止を振り切って村中の人々が更に次の村にその興奮を伝えるに躍り出た様子が描かれた。民衆のエネルギーが津波のように村々に広がり、幕末の到来を予感させるものであった。歴史の時代の各節目にはきっとこのような一般民衆の湧き上がるエネルギーの爆発があったに違いない。

明治維新の東京遷都により空洞化した京都市で、1895年（明治28年）に平安遷都1100年を記念して平安神宮が創建され、その記念行事として以後毎年10月22日に時代祭が行われ、各時代の風俗を再現した行列が行進する。明治維新を告げる鼓笛隊から始まり、時代をさかのぼって延暦時代の神官行列で終わる。しかしこの支配階級の風俗を支えた民衆の姿はあまり浮かんでこない。平安京に都が落ち着くまでの数百年間には数々の政争や天災があり、江戸300年の太平の世の前にも数百年の戦乱の世があった。幕末から明治維新にかけての激動する民衆の力も富国強兵の中央集権国家の力で抑え込まれた。1945年に西欧列強との覇権争いに敗れて、初めて主権在民と戦争放棄の平和憲法のもとに民主的議会政治が始まった。その結果、無一物の焼け跡から経済大国が生まれ、医療分野では国民皆医療保険が定着し、教育面では国民皆教育が普及し、電子情報網が完備した。それにもかかわらず、皮肉なことにその陰で、貧富格差の増大、医療崩壊、学級崩壊、人間の絆の崩壊（核家族化）が進行している。

ここで昨年の夏に筆者の見た不思議な夢の体験メモを記す。〈山里の丘の麓にみすぼら

しい一軒の山小屋を見つけた。のどが渴いていたので立ち寄ったが、人の気配はなく、全く何も無かった。しかしよく見ると、部屋の隅に一人の老人が座っていた。黙って何も語らないが、こちらから尋ねると必ず答えてくれた。よく見ると、その後ろには外からは想像もできないほどの無数の扉があって、どこでも好きなところに入って良いと言う。指された扉を開けると、そこには無限の空間が開かれていた。そびえる連山の前に広がる美しい花園があって、昏々と湧き出る泉があった。早速のどを潤して、元の扉から出ると、全く何もない老人一人の世界であった。老人にお礼を述べて帰ろうとすると、何か忘れ物があったように思うがなかなか思いつかない。やっと気づいて老人に尋ねると、別の扉を示してくれた。その扉を開けると、全く宇宙空間に遊泳するように、瞬く星に取り巻かれた世界であった。このようにして、次々に無数の扉を開けて回ったところで、夢から覚めた。〈まだまだ夢の続く限り、見残したこと、やり残したことがあったようである。今となって考えてみると、メモに残されたみすぼらしい山小屋は、それぞれ人間の「いのち」の小屋であり、その中で選択した扉は人生そのものを象徴しているように思える。生老病死は人間の宿命である。筆者が山小屋の夢を見たのは、生との出会い、生の誕生そのものであり、無数の扉の中の一つの世界がその後展開する人生であり、夢から覚めた時が死そのものであろう。生と死には何の必然性もなく、突然に訪れるものであり、本人に自覚されるものではない。その意味では個々の人生はすべて多様な未完の物語であるとも言えよう。

現在私どもが生きている21世紀は、まさに「意の文化」の始まりの激動の時代である。すでに私どもは「知の文化」から、20世紀に原子力や遺伝子力をはじめとする多くの知恵を得てきた。21世紀に入り、電子媒体による情報力という新しい知恵を積み上げた。しかし本号 Random Scope『五感以外の第6の感覚としての化学受容体のはたらき』で紹介しているように、人間の絆は、インターネットだけでは繋がらない、対面の「いのち」の感覚を必要としているのかもしれない。本号の『連歌形式サロン談義』第二主題二句で紹介されている、核社会の中での孤独な老母の「お前が泊まってくると安心して熟睡できる」という言葉には、何か強い五感以外の「いのち」の感覚を覚えた。

ファウスト博士の言葉を借りれば、「この世を最も奥の奥で動かしている力は何か、そのもとは何か？」というように、人間の知恵の探究力は無限で、知の科学は今後も無限に発展していくと思う。それでは、これらの知の探究力を生かして、数百年後の達成期に、

どのような「意の文化」が実現しているのでしょうか？ メフィストテレスに魔法の力を果たして返納できるのだろうか？ それには現在の激動期に生きている人間一人一人の意思が重要である。すなわち、知のネットワーク（インターネット文化）と情のネットワーク（「いのち」の感覚でつながる人間の絆）に支えられた「路傍の石」としての自覚である。山本有三作「路傍の石」の主人公は、〈たったひとりしかいない自分を、たった一度しかない人生を、本当に生かさなかつたら、人間生まれてきたかいないじゃないか〉と言っている。中国唐時代の雲門禅師の言葉としての「日々是好日」は、〈一日は二度となない一日であり、かけがえのない一時であり、一日である。この一日を全身全霊で生きること〉であり、〈座して待つのでなく、主体的に日々好日を見出して生きる〉中に、「意の文化」の達成期に向けての一里塚の捨て石としての役目があるのではなかろうか。私どもは、激動の時代に生きる権利として、生きるための多様な自由意思の選択を得たのである。



Random Scope

五感以外の第6の感覚としての化学受容体のはたらき

快い花の香り、嫌な汚物の臭い、いずれもその発する気体化学物質が鼻粘膜の嗅受容器を刺激して生ずる嗅覚である。ところで哺乳類や爬虫類に生得的な、性誘引物質や摂食刺激物質に対する社会的、防御的感覚は、嗅覚とは異なり、鼻腔の左右に存在する囊状の器官（鋤鼻器官またはヤコブソン器官）の2種の化学受容体、V1RとV2Rの働きによる。この受容体はそれぞれ数百種あり、刺激されると感覚神経に伝わりと共に *Egr1* という遺伝子が発現する。今回マウスを用いて、受容体と誘発物質との関係が分子レベルで体系化された。主として、V1Rは一般的生理条件の変化に反応し、V2Rは特異的な性、天敵、獲物などの認識に関係している。今後その嗅覚物質とは異なる化学物質の本体や先天的特異性の解明が期待される。しかしヒトだけは視覚動物であって、嗅覚動物としての霊長類の例外で、これらの受容体が発現して実際に働いている鋤鼻器官は見つかっていない。しかし人のいわゆる第六感や霊感も、やがて個人から発散する特有の微量化学物質が同定され、他人の痕跡的な第6の受容体を刺激し、人間関係を保つうえで重要な感覚として認識されるかもしれない。そうなれば、第6の感覚は、人間を含むすべての動植物に共有される「いのち」の感覚とも言えよう。 (Yan)

Isogai, Y. et al.: Nature, **478**, 241-245 (2011)

目次

特集 1/ 地震国の原子力発電を考える 特集 2/ 現代日本の教育課題 —環境変容への対応—

Editorial

激動の時代に生きる 430
山岸秀夫

執筆者紹介 437

特集 1：地震国の原子力発電を考える

特集 1 “地震国の原子力発電を考える” にあたって 439
竹下 賢

原子力発電とその安全性—原子炉の安全性を中心に— 441
西原英晃

内部被ばくは外部被ばくより危険か？ 452
丹羽太貫

日本の原子力「ガバナンス」—その歴史と課題— 459
足立幸男

特集 2：現代日本の教育課題—環境変容への対応—

特集 2 “現代日本の教育課題—環境変容への対応—” にあたって 468
村田翼夫

少子化時代の学校づくりをどう進めるか 470
上田 学

これからの特別支援教育—インクルーシブ教育の可能性— 481
中田英雄

社会教育分野における課題—人がつながる「新たなコミュニティ」の構築に向けて— 493
岩槻知也

多文化共生教育の必要性和課題 501
村田翼夫

教育課程の課題—子どもの成育環境の変容と体験活動— 513
山口 満

いのちの科学プロジェクトシリーズ

テーマ：共に生きる

㊸年輪年代法と木質古文化財への応用 525

光谷拓実

㊸ 2011年東北地方太平洋沖地震 538

梅田康弘

連載講座

メタボの正体 (Ⅳ) 550

篠山重威

トピックス

ホスピスは活き活きと生きるところー終末期医療は完成期医療ですー

..... 563

人見滋樹

随想

中央アジアの青い国ウズベキスタン 578

本庄 巖

オピニオン

連載：医師になるということー若い人たちのためにー

(Ⅲ) 社会から医療界への視線 584

萬野裕彦

コメント：医師になること 592

篠山重威

サロン談義

サロン談義 9 (連歌形式) 生老病死の医療 (Ⅱ)

第一主題 (二句)：末期心不全と緩和医療 596

小笹寧子

(三句)：がん患者さんといのちの医療 598

上田公介

(四句)：治らない病気 600

本庄 巖

(挙句)：宗教に問われていることー人々の心に届く死生観

..... 603

窪寺俊之

| | |
|--|------|
| 第二主題（発句）：高齢者医療－Japan Syndrome について | 606 |
| | 小笹寧子 |
| （二句）：介護と家族問題 | 610 |
| | 上田公介 |
| （三句）：最後の場所 | 613 |
| | 本庄 巖 |

Books

| | |
|-----------------------|-----|
| 中西 進 著 | 616 |
| 『こころの日本文化史』 | |
| 外川 淳 著 | 617 |
| 『天災と復興の日本史』 | |
| 藤田和恵 著 | 618 |
| 『ルポ 患者を守る人びと－医療崩壊の中で』 | |
| 中村安秀・河森正人 編 | 619 |
| 『グローバル人間学の世界』 | |
| 稲川 実・山本芳美 著 | 620 |
| 『靴づくりの文化史－日本の靴と職人－』 | |

Random Scope

| | |
|----------------------------------|-----|
| 五感以外の第 6 の感覚としての化学受容体のはたらき | 433 |
| 安定同位体を測って恐竜の体温を推定する | 458 |
| 網膜における光感受性神経細胞の機能的分化 | |
| ：リズム光同調と瞳孔反射 | 467 |
| 心筋梗塞後に心外膜細胞が心筋細胞へ再生する | 549 |
| 骨粗鬆症の治療 | 583 |
| 水素を利用する熱水噴出孔の共生生物 | 595 |

| | |
|----------------------|-----|
| 読者のコーナー | 621 |
|----------------------|-----|

| | |
|------------|-----|
| おしらせ | 623 |
|------------|-----|

| | |
|------------|-----|
| 編集後記 | 624 |
|------------|-----|

| | |
|------------|-----|
| 投稿規定 | 625 |
|------------|-----|

| | |
|--------------|-----|
| 本誌購読案内 | 626 |
|--------------|-----|

執筆者紹介

Editorial：山岸 秀夫（やまぎし ひでお）：公益財団法人体質研究会主任研究員、京都大学名誉教授（免疫学、分子遺伝学）。詳細は本誌 24 巻 1 号 10 ページに紹介済み。

特集 1：竹下 賢（たけした けん）：関西大学教授（法哲学・環境法思想）。詳細は本誌 24 巻 2 号 147 ページに紹介済み。

西原 英晃（にしはら ひであき）：京都大学名誉教授（原子力工学）。詳細は本誌 24 巻 2 号 148 ページに紹介済み。

丹羽 太貫（にわ おおつら）

1943 年生まれ。京都大学理学部卒、スタンフォード大学大学院修了。広島大学原爆放射能医学研究所、京都大学放射線生物研究センター、放射線医学総合研究所を歴任。専門は放射線生物学。京都大学名誉教授、国際放射線防護委員会主委員会委員。2005 年レントゲン賞（ドイツ）受賞。著書に、「放射線基礎医学」（共著、金芳堂）、「生物と人間」（共著、裳華房）ほか。

足立 幸男（あだち ゆきお）

1947 年 10 月生まれ。京都大学大学院法学研究科博士課程政治学専攻、京都大学博士（法学）。帝塚山大学教養学部専任講師、助教授を経て（1975-85）、京都大学助教授、教授（教養部を経て人間・環境学研究科に配置換え）（1985-2008）、関西大学政策創造学部教授（2008 年 4 月から現在に至る）。京都大学名誉教授。編著に「議論の論理－民主主義と議論」（木鐸社、1984）、「政策と価値－現代の政治哲学」（ミネルヴァ書房、1991）、「公共政策学入門」（有斐閣、1994）、「公共政策学」（ミネルヴァ書房、2003）、「政策学的思考とは何か－公共政策学原論の試み」（勁草書房、2005）、「公共政策学とは何か」（ミネルヴァ書房、2009）、「持続可能な未来のための民主主義」（ミネルヴァ書房、2009）など。

特集 2：村田 翼夫（むらた よくお）

1941 年生まれ。京都大学教育学部卒業。カリフォルニア大学バークレー校教育学研究科修士課程修了。京都大学博士（教育学）。京都大学教育学部助手、マラヤ大学文学部非常勤講師、京都家政短期大学講師、国立教育研究所研究員、筑波大学教育学系教授、大阪成蹊大学現代経営情報学部教授を経て、2007 年より京都女子大学発達教育学部教授に就任し現在に至る。専門分野は、東南アジアを主とする比較国際教育学。著書に、「タイにおける教育発展－国民統合・文化・教育協力－」（東信堂、2007）、共編著「バイリンガル・テキスト：現代日本の教育－制度と内容－」（東信堂、2010）、共編著「多文化共生社会の教育」（玉川大学出版部、2001）、編著「東南アジア諸国の国民統合と教育－多民族社会における葛藤－」（東信堂、2001）などあり。

上田 学（うえだ まなぶ）

1947 年京都市生まれ。神戸大学卒業。京都大学大学院博士課程単位修得退学。京都大学博士（教育学）。帝塚山大学助教授を経て、1991 年から京都女子大学教授。専門分野は教育行政学。主な著書に「日本と英国の私立学校」（玉川大学出版部、2009）、「日本の近代教育とインド」（多賀出版、2001）、翻訳に「ある英国人のみた明治後期の日本の教育」（W. H. シャープ著、行路社、1995）などあり。

中田 英雄（なかた ひでお）

1948 年生まれ。東京教育大学大学院博士課程単位取得退学。筑波大学心身障害学系講師、筑波大学心身障害学系助教授、2002 年筑波大学心身障害学系教授、2004 年～2009 年筑波大学教育開発国際協力研究センター・センター長、2009 年～現在まで筑波大学教育開発国際協力研究センター教授。専門分野は特別支援教育学、教育開発国際協力研究。主な編著に「特別支援教育制度」（2010）、「アダプテッドスポーツの科学」（市村出版、2004）、「特別支援教育制度」、「バイリンガル・テキスト：現代日本の教育－制度と内容－」（東信堂、2010）、監訳に「盲・視覚障害百科事典」（明石書店、2009）などあり。

岩槻 知也（いわつき ともや）

1966 年生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程中退後、大阪大学人間科学部助手を経て現職（博士、人間科学）。専門分野は、社会教育学・生涯学習論。主な編著は「家庭・学校・社会で育む発達資産－新しい視点の生涯学習」（北大路書房、2007）など。

山口 満（やまぐち みつる）

1937 年生まれ。東京教育大学教育学部卒業、東京教育大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。山梨県立女子短期大学講師、秋田大学教育学部助教授、奈良教育大学教育学部助教授、筑波大学教育学系教授、筑波大学名誉教授、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部教授、2009 年より中部学院大学人間福祉学部特任教授に就任し現在に至る。専門分野は教育課程論。主な共著に「教

育の個別化」(明治図書、1988)、編著「教育課程の変遷からみた戦後高校教育史」(学事出版、1995)「第二版 現代カリキュラム研究」(学文社、2005)、「改訂新版・特別活動と人間形成」(学文社、2010)、共編著「バイリンガル・テキスト：現代日本の教育－制度と内容－」(東信堂、2010) などあり。

いのちの科学プロジェクトシリーズ：光谷 拓実 (みつたに たくみ) _____

1947年生まれ。千葉大学大学院園芸学研究科修士課程修了。奈良文化財研究所年代学研究室長、京都大学大学院人間環境学研究科客員教授、総合地球環境学研究所客員教授など歴任。専門は年輪年代学。現在、総合地球環境学研究所特別客員教授、奈良文化財研究所客員研究員。著書に「年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－」(同朋舎)、「年輪年代法と文化財」、「日本の美術」No. 421 (至文堂)、「年輪年代法による法隆寺西院伽藍の総合的年代調査」、「佛教美術」308号 (毎日新聞社) ほか。

梅田 康弘 (うめだ やすひろ) _____

1943年京都府福知山市生まれ。京都大学理学研究科修士課程中退。同学助手を経て、防災研究所教授。地震予知研究センター長を経て2007年停年退職後、産業技術総合研究所客員研究員、京都大学名誉教授。専門は地震学。科学技術・学術審議会委員、地震調査研究推進本部専門委員などを歴任。著書に Historical Seismograms and Earthquakes of the World (共著、Academic Press) ほか。

連載講座：篠山 重威 (ささやま しげたけ)：同志社大学教授、大寿会病院理事、京都大学名誉教授 (循環器内科学)。詳細は本誌 24 巻 1 号 10 ページに紹介済み。 _____

トピックス：人見 滋樹 (ひとみ しげき) _____

1936年生まれ。京都大学医学部卒業。京都大学胸部疾患研究所教授・同所長・同付属病院院長、奈良東病院院長、高槻赤十字病院院長を歴任。京都大学名誉教授。京都大学時代には、肺がんの外科療法、肺移植の研究・臨床に携わり、高槻赤十字病院ではホスピスを創立した。著書に「胸部の異常陰影」、「呼吸器外科の実際」、「呼吸器 CT 診断」、「心臓移植・肺移植」(以上 共著、金芳堂)、「呼吸器外科の最新医療」(監修、先端医療技術研究所) ほか。

理想：本庄 巖 (ほんじょう いわお)：京都大学名誉教授 (耳鼻咽喉科学)。詳細は本誌 24 巻 1 号 8 ページに紹介済み。 _____

オピニオン：萬野 裕彦 (まんの やすひこ)：医学部受験専門予備校講師 (文章師)。詳細は本誌 24 巻 2 号 148 ページに紹介済み。 _____

篠山 重威 (ささやま しげたけ)：既出 _____

サロン談義：小笹 寧子 (おざさ ねいこ) _____

2000年京都府立医科大学医学部卒業。2008年京都大学大学院博士課程修了、医学博士。京都大学医学部附属病院医員を経て、2009年同助教 (循環器内科)。

上田 公介 (うえだ こうすけ) _____

1945年生まれ。名古屋市立大学医学部卒業、医学博士。伊勢市亀谷病院 (現・伊勢慶応病院) を経て、名古屋市立大学医学部泌尿器科学教室入局、同助手、専任講師、助教授。2000年より名古屋市立東市民病院泌尿器科部長、名古屋市立大学医学部臨床教授。2004年より、はちや整形外科病院・名古屋前立腺センター / 温熱治療研究所・所長。同志社大学生命医科学部客員教授を兼任。著書に「負けてたまるか膀胱癌」、「ザ・前立腺」など。

本庄 巖 (ほんじょう いわお)：既出 _____

窪寺 俊之 (くぼてら としゆき) _____

1939年東京生まれ。埼玉大学 (教育学部)、東京都立大学大学院 (臨床心理学専攻) に学び、1968~1974年米国に留学。エモリー大学神学部卒 (神学)、コロンビア神学大学院卒 (牧会学)。大阪大学博士。リッチモンド記念病院 (ヴァージニア州) と淀川キリスト病院でチャプレン (病院付牧師)。イーストベイ・フリーメソジスト教会牧師 (米国、サンフランシスコ市)、関西学院大学神学部教授を経て、現在、聖学院大学大学院教授 (スピリチュアルケア学特論など担当)。臨床パストラル・スーパーヴァイザー (日本パストラルケア・カウンセリング協会認定)。著書訳書に「スピリチュアルケア入門」、「スピリチュアルケア学序説」、「スピリチュアルケア学概説」、「スピリチュアルケアを語る」(共著)、「続スピリチュアルケアを語る」(共著)、「スピリチュアルケアを語る 第3集」(共著)、「緩和医療学」(共著)、「生と死」(共著)、「系統看護学講座 別巻 10 ターミナルケア」(共著)、「魂への配慮」(訳)、「神学とは何か」(訳)、「愛するものが死にゆくとき」(共訳)、「看護の中の宗教的ケア」(共訳) など。

特集 1 “地震国の原子力発電を考える” にあたって

竹下 賢*



東日本大震災からすでに半年以上が経つが、それがもたらした福島第一発電所の事故は、現段階で小康状態に落ち着いたとはいえ、発電所の先行きと行く末はいまだに不明のままである。本特集のもとになったのは、健康財団グループと JCSD（科学進歩日本委員会）の共催による第 20 回いのちの科学フォーラム（2011 年 8 月 6 日開催、テーマ：地震国の原子力発電を考える）であり、その意図は、未曾有の原発事故を深刻に受け止めて、原子力発電という電力政策の是非をあらためて検討するためのよすがに、専門家の見解を聞くということにあった。関連する分野は広範囲にわたるので、それらを網羅することはとうていできないが、原子力発電という政策形成にとってかなり重要だと思われる、原子力工学、放射線生物学、政策ガバナンス論の三つの専門的立場から、意見を提示していただいた。

*関西大学教授（法哲学・環境法思想）

これらのご意見は結局のところ、ともにこの政策決定の前提となるリスク問題に対する、各ご専門からの回答となった。私はこのことには大きな含意があると思うが、それは現代の政策的課題の多くがリスク問題をはらむという事態である。まさに、現代は何らかのリスクを冒さないと生活できないリスク社会であり、そこでは、リスクを冒す代償として安楽というベネフィットが得られ、そこに我々は安住している。自動車や列車などの交通機関を考えればわかるように、それらにリスクはつきものであっても、その利用が断念されることはない。

しかし、現在のリスクはいっそう複雑である。葉害や食害などと同様、原子力発電などの場合も一般にリスクは潜在的な可能性として考えられ、それをベネフィットと比較衡量して政策形成が行われる。ただ、そのリスクが現実のものになったとき、一般人に対する衝撃は大きいものになる。というのも、可能性にとどまっていることは現実とは大違いであるというだけでなく、今のリスク評価には高度な科学的な知識が必要で、素人は十分な理解なしに専門家の判断を受け入れがちであるからでもある。逆に、いったんリスクが現実化すると、素人は科学的な判断を無視したリスクの過大評価が行われることにもなる。そうとすれば特集との関連で、最初の二つの科学的な見解に耳を傾けることが重要である。

特集の最後の寄稿は、前二者のように自然科学ではなく社会科学の分野に属していて、政策学の立場から原子力発電を検討している。安全な原子炉について検討を加えると同時に、その設計と運用におけるリスク管理の問題性を指摘している。最後の寄稿はこの論点に焦点を合わせているといえ、こうしたリスク管理が歴史的にみて十分に達成されることはない判断されるとすれば、目標として脱原発を掲げるしかないという。以下、こうした問題の広がりをお読み取りいただき、この厄介なリスク問題について考えをめぐらしていただきたい。

(イラスト：中井英之)

特集2 “現代日本の教育課題 —環境変容への対応—” にあたって

村田翼夫*



2010年6月に筆者は山口 満（筑波大学名誉教授）と共編著で「バイリンガル・テキスト：現代日本の教育—制度と内容—」を刊行しました。同書では、わが国の学校制度、教育行財政、学校経営、社会教育、教員制度といった教育の枠組みから、国際教育、教育内容・方法（9教科を含む）までを総合的に取り上げ、それらの現状と問題・課題を指摘しました。また、日本語のみならず英語にも翻訳して外国人にも理解してもらえるように工夫しました。そのテキストを通して明らかになったのは、今日の教育が少子高齢化、国際化・グローバル化、情報化などの大きな社会環境の変化に直面して多くの課題を抱えている現実でありました。

具体的に現代の子どもが置かれている生活・学校環境をみてみると、大きな変化に直面

*京都女子大学教授、筑波大学名誉教授（比較国際教育学）

していることが理解されます。子どもたちの立場からみた主な変化を挙げてみましょう。第 1 に、学校教育において従来、知識の教育が中心とされてきましたが、生きる力、思考力を含めた学力、学ぶ意欲などの育成を旨とした学ぶことへの支援へ重点が移ってきています。第 2 に、生徒の個性的な関心や要求に応えるように配慮した教育活動が増えています。それとともに、家族の絆が弱まり、地域住民間の関係が希薄化する一方で保護者や地域住民の協力により学校と地域をつなぐ学習ネットワークの広がりが求められています。第 3 に、情報メディアの発達により子どもや若者たちが直接的に触れ合う機会が少なくなり、メディアを介した間接的な関係や疑似体験による関わり合いに終始する者が増えています。そのため彼らの体験学習や共同学習が課題となっています。第 4 に、国際化・グローバル化の進展により、地域社会や学校のクラスにおいて外国人や外国人の児童生徒たちと接触する機会が増え、日本の子ども達にとって彼らとどのように接すればよいのか戸惑う場面が多くみられるようになっています。

こうした子どもを取り巻く環境や社会状況が変化していますが、実際の学校教育はどのようになっているか、いかなる問題を抱えているのか、さらにこれからの望ましい教育にとっていかなる課題が横たわっているのか、そのことを考察してみたいと思いました。今回の特集では、上述の「バイリンガル・テキスト」を執筆した専門家の方々を中心に各種の環境変化と教育の関係を究明されている研究者に執筆をお願いしました。

上田 学氏は、少子化に伴う学級規模の変化と教育財政の関係、中田英雄氏は、各児童生徒の特別なニーズに応じるために障害児と健常児が同じ場で教育が可能かという点に関しインクルーシブ教育の立場から論じています。岩槻知也氏は無縁社会と呼ばれるようになっている地域において注目される地域教育協議会活動を考察しています。山口 満氏は、子どもが生活している家族・地域・社会環境が大きく変容していることに対応するために体験活動拡充の重要性を訴えています。筆者は、国際化・グローバル化が進展する社会における学校教育の問題を取り上げ、重要な課題を提起しました。以上のような論説が、今後の日本の教育変革を考えていくために何らかの示唆を提供する機会になれば幸いに存じます。

(イラスト：中井英之)